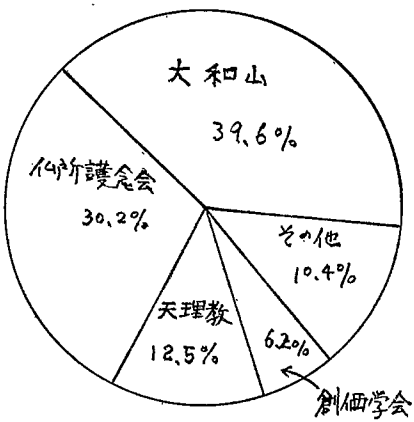
■ルポルタージュ■

みちのくの新興宗教　松緑神道大和山

内山　堯邦

まず左の図を御覧いただきたい、これは昨年夏青森県木造町において実施した、社会制度と宗教のかかわりあいについての調査項目のデータであるが、あなたはいわゆる新興宗教に入っていますかという質問に対し、加入と答えたもの九六人の内訳である。

関東以西では耳なれない教団、大和山の圧倒的数字にまずおどろき、興味をもったのがこのレポートのきっかけであった。



新興宗教に加入と答えたもののうち四〇％が大和山という教団に所属しており、実数では三八人で、この調査は一万六千人の選挙人名簿から三二分の一の確率で被調査者を抽出しているので木造町の成人人口のうち約一一〇〇名位の信徒があるものと推測されるのである。

新興宗教はその都市的性格から農村部への滲透がむずかしいといわれ、（事実、図の如く天理教一二・五％、創価学会六・二％にとどまっている）またわれわれも、農村における共同社会的構造と、共同社会内結合のシンボルとして機能する宗教（既成宗教）という仮説を立てており、いわゆる農村地帯に教線を張っている（東北・北海道で信徒

三万といわれる）大和山教団に興味をもったのである。

大和山教団はすでに立教以来五十五年といわれるが、外部に紹介されたことはほとんどなく、わずかに雑誌月刊ペンに新宗連新聞編集長の清水雅人氏が紹介されたのみであ、ったので、氏の紹介を得てわれわれも大和山教団を訪問することとなったのである。

七月二十九日から八月四日の木造での調査を終え、われわれ調査部のメンバー（内山、望月、外岡）は、青森、浅虫を経由して大和山へ向った。大和山本部は東北本線で、浅虫の一つ手前の駅小湊から、大和山スカイラインと名づけられた県道を十五キロ外童子山に入ったところにあった。

小湊駅前には教団の案内所があったけれども、その後の道すじには一本道のためもあるが、案内板もなく大和山への分岐点でもワラ半紙大のベニヤ板に「大和山」と矢印されていたのみで、事実われわれもこの案内板を見おとしてしまい、通りすぎて戻らねばならなかったのであるが、知っている者のみが登る山であるのか、興味本位の登山に無言の拒否の姿勢であるのか、およそ宣伝的雰囲気のない道すじであった。

しかしこの山奥にこつぜんと開けた教団本部はまさに宗教教団のそれであり、それまでの道すじにみられたひなびた山村の姿ではなく、決してけんらんとしたものではないけれども、立ち並ぶ信徒の宿舎と教団本部はみちのくの新興教団の姿を示すに充分のものであった。

教団本部の事務室で案内を乞うと、事務所へ通され、執務されていた教主御自身が応待に出られたのにはいささかおどろいてしまった。背に角道と染められたハッピを着ておよそそこには、一般的宗教教団のもつ権威主義的雰囲気は全く感ぜられず、気軽に応対に出られた大和小松風教主に教団の成立、展開、布教の方向などきたんなく話を聞かせて頂いたのである。

教団の成立

この教団の創唱者、大和松風教祖は俗名を田沢清四郎といい、近江商人の系に属し、青森市で薪炭業を営んでいた田沢長四郎氏の次男として生まれ、長男の夭折とともに、家業を継ぎ、外童子山（現在の大和山）に入って杣夫や製炭夫を監督していた。

たまたまこの山で霊象を感受した杣夫が祈禱師となりよく当るので繁盛していたが、山の人々はこの霊象を山神さまの仕業と信じ、同業者の喜捨を集めて、杣夫の霊象をうけた場所に堂宇を建立することとなった。その杣夫の予言した日時（大正七年四月十二日午後三時）場所に、現われて堂宇を建てることとなったのが田沢清四郎氏であった。

市井の商人であった氏はこのときを境に事業、妻子を捨

て道を求める修業者としてこの山に住むこととなったのである。修業の生活が続いた大正八年八月二十二日、修業していた彼は始めて神の声を聞き、二十三夜の月を拝み、九曜の星を守護神として授かった。その宗教的体験によって「神に召された」自覚を明確にしたと伝えられている。教団はこの日を立教の日とし、毎年大祭を催し、また月のまわりを八つの星がとりまく紋を神紋（教団の紋）と定めている。

この日から教祖は偉大な宗教的霊感を発揮することとなり、救いを求める人々が門前市をなしたと伝えられている。

当時の社会的背景は、大正七年の米騒動のあとの社会的変動の極にあり、経済恐慌は農村における小作争議を活発にさせており、農民のやり場のない苦悩が、霊験ある修業者に向けられていったであろうことは充分考えられる。

また大正十一年には教祖の次女とみ子（〃松蝶さま〃当時十二才）にも天啓が下り、現在大和山の教典となっている〃三光の教典〃〃五光の神諭〃を授けられたという。このときから彼女は大和山の教えを〃神さま〃から取り継ぎ教祖が解読するということになった。大和松風教祖は昭和四十一年亡くなられたが、松蝶さまは現在も信徒の悩みの解決方法や、願いをきき、御神託を伝える霊能の仕事をされている。

大正十一年から降下した啓典は、済度教典（十二巻）仏神教（全十巻）外国治教（全七巻）大和山神諭などおびただしい数にのぼるという。教祖はこれら教典の解読と修業にとりくみ、昭和五年一月十五日教祖に救われた篤信の人々が集まって〃松緑神道大和山会〃が結成され、昭和二十四年十二月宗教法人として再発足したものである。

東北に限らず霊能者の存在は多いし、とくに東北では民間信仰の中に根をおろした修験、イタコなどに代表される霊能に対する信仰が盛んである。その意味において新らしい教団の生ずる素地は充分あるにもかかわらず、新興教団の発生はそのほとんどが関東以西であり、関東以北における新興教団としては、この大和山が唯一である。

その理由が、「神を売りものとせず、信徒をくいものとせず」という教風によるのか、あるいは他の理由によるかの分析は別にゆずるとして、現在の大和山の教線と考え方方向性について大和小松風（田沢康三郎）現教主とのインタビューをまとめながら述べてみる。

大和山教団の現況と考え方

信徒は約三万、北海道、青森にそれぞれ約四割づつ、岩手に一割、その他全国に一割ということであり、北海道と青森に集中している。信徒の組織は、三三の道場と約二〇〇支部からなり、会員の会費は年額五〇〇円とのこと、

会員名簿は年一度本部で集計しており、会員一人一人を本部で把握しているのが一つの特徴であろう。

特に農村地域に滲透していることは一つの興味の焦点であり、素直に伺ってみたが、とくに農村に対しての布教を行なっているわけでもなく、教義の中に農村的なものがあるわけでもないとのこと。しかし農民の方が定着しているせいもあり、信仰の継続という点で有利な面があることは認めているようである。

教団の入口には大きなみかげ石に「自他力本願」と大書されており、その点と信仰の純粋性とについての質問に対しては、自分の信仰を大切にすると同時に他人の信仰も尊重すべきであるという姿勢が基本線であり、お仏壇やお札の掃除などをしたこともあったけれども、無理に押しつけても仕方がないので現在は行なっていない。やはり自然に信徒の成長をまつのが一番ではなかろうか。どうも日本人は二足のわらじをはく、多神教的傾向がつよいのを認めざるを得ない。しかし自他力本願という考え方は立教以来の旗印で、人は神に生かされ生きるのであり、また神の教えを祈りつつ実践することによって願望も成就するので、その意味での自他力本願で、決して混合主義ではないと強調された。

とくに宗教的トレランス（寛容）は重要で、自分が新宗連へ副理事長として参加しているのも、またそこの場でいうのも信仰は異っても人間が平和に生きたいというのは全ての宗教者の願いであるはずで、その限りにおいて他の神仏をけなす理由はないのだから、それぞれの信仰を大切にしていこうというのが基本的考え方だということである。

教主の新宗連副理事長というポストは重要で、氏が東京大学宗教史学科の出身で、岸本英夫氏の弟子にあたるそうであるが、比較宗教学を専攻されたということは、一宗をひきいる際に教条主義的になり切れない弱さ（自分でも認めておられたが）になると考えられる。

一方新宗連においては、どちらかというと教団外の宗教学者あるいは宗教評論家にイデオローグを求めがちな新興教団の中で、貴重な内部のインテリゲンチアとして、評価することができ、新宗連の方向づけのうえからも重要な位置を占めているものと考えられるのである。

清水氏のレポートのタイトルは「みちのくの宗教的共産社会」となっており、その点について伺ってみたのであるが、現実の自由主義社会を是認しつつも、将来の方向として全ての人が平等であるべきだというのは全ての宗教に共通する考え方であり、自分のところではとくに教祖の開教以来の教えの中にその思想が流れている。具体的には教団本部で生活する人々に限って実施している。したがって考え方としては指導しているけれども、今全ての信徒にそれを要求するものではない。現実には資本主義社会であり、

自由主義社会なのだから、それをくつがえそうというものでもない。しかし教団本部で生活する人々は全く平等に、必要に応じて給料を払い生活を平等にするように心がけている。（ちなみに教主自身の給料は四万円以下とのこと）子供のあるものは養育に金がかかるのであり、それに応じて給料は払われるべきだろう。しかし、仲々人間の欲望をコントロールすることはむずかしく、ともすればゆるみがちになる気持をひきしめるため、京都の「一灯園」へも年一回程度交流をもち、自らの気持をひきしめているそうである。

この教団は会員からの会費以外に一切の収益はない。お札の販売もしなければ、講師の派遣も本部でもつそうである。それではそれらの費用はどこから生ずるのか、それは教団の外郭団体の事業の収入でまかなわれる。

教団の外郭団体として農業生産を行う「みちのく農園」販売を担当する株式会社「やまと」、青森県有数の建設会社「国土社」がある。それぞれは、みちのく農園で農作物を生産し、それをやまとでは製品化して農園と国土社へ販売する、また国土社は農園の開拓の仕事をするという形で、ここ大和山の本部は、それぞれの団体が、生産と消費を分ちあう形での共同社会ができ、そのシンボルとして大和山の信仰があるという形で、宗教的共産活動の自己再生産を高めているのである。

やまとと国土社は、教団外へも活動を広げ、やまとは種子、球根の販売、国土社は外部の受注も受け、津軽平野の農地改良事業に国土社のマークをつけたブルドーザーが農地の整理に動いているのを調査の際に見てきている。

この教団では必要なものは全て自らの手で作り出すという思想が一つの方向であるようで、農作物、樹木の品種改良、建物の建設はもとより、発電所まで自らの手で作り上げてしまっている。清水氏の曰く「恐るべきしろうとの集団」ということになろうか、最近では布教の方法に十六ミリ映画を導入し、山の生活を映した「み山讃歌」「よみがえる青垣の里」は全くの素人の作品であるにもかかわらず、文部省選定の栄誉を獲得している。

とくに青少年教育には熱心で、夏休みの信徒子弟の林間学校はもちろんであるが、現在は高等学校の建設が進められており、その前身となる生活学苑松風塾という私塾が農家の子弟をあずかって教育されているが、この生徒の情操を高めるための音楽教育としてマンドリン・オーケストラまで組織されており、ドレミを知らない塾生が一年後には立派な演奏会をもつまでになるそうである。

まさにやればできるという思想がここにはある。

ある信徒とのインタビュー

最後に信徒の側からの信仰体験ものべておく必要があろ

う。本部訪問に先立って、木造町で教団のある信徒のお宅へ伺って話を聞く機会を得たのであるが、われわれのぶしつけな質問に対して、全く素朴にトツトツとして語ってくれた信仰体験は、「親は大和山の信者であったけれども自分は別に信仰をしていたわけではなく、都会にあこがれる青年だった。たまたま、小湊駅を汽車で通過の際駅で大和山の案内板を見たので、家で親にそのことを話すと大和山ではそんなことはしていないという、そこで再び行ってみたところ、事実駅に案内板のようなものはなかった。不思議なこともあると思って、ついでに山に登ってみたところ、そこで生活している人々の生き生きした姿に打たれ、都会にあこがれていた自分を反省したのであるが、その後持病であった発疹もいつのまにか直っていた。何か感ずるものがあり、その後信徒として生活している」、ということである。「自分の仲間をみても、ほとんどの人がこのような何らかの具体的経験をもっており、それが信徒の信仰を強いものにしているのではないだろうか」、ということであった。

新らしい信仰へのきっかけが、具体的な体験に発する場合の多いことの一つの例であるが、現在の大和山を支えているものが、カリスマ的存在としての松蝶さまと、小松風教主のオルガナイザーとしてのすぐれた実行力であることは推測がつく。しかしそれがみちのくという風土に根をおろすことになったこと、それが唯一のものであることについての理由を明らかにすることは現在の段階ではむずかしい。近江商人の末裔という家系である田沢家の西南日本的開明性と、東京大学出身という現教主の合理性が、東北という呪術的色彩の濃い風土に、松蝶さまという高い霊能者の助けを得て確立した宗教ということができるであろう。

最後に、紹介の労をいとわなかった清水雅人氏、お忙しい中を心よくわれわれの訪問を受け入れてくださった田沢教主に誌上を借りてお礼申上げペンを置く。